

セミナー ‘Proferamus iubilo’ 2018

2018年8月4日(土) 13:00より 18歳以下の方対象
なお、16:00からの公開コンサート(参加型)はどなたでもお越しいただけます。

於:聖グレゴリオの家聖堂



概要

セミナー「プロフェラムス・ユビロ」は、若い方が、ラテン語にほんの少し親しみ、小さなオーケストラと合唱により、ミサ曲やグラン・モテを演奏してみるというものです。

次の3部構成です。合唱あるいはヴァイオリン等の弦楽器、あるいはチェンバロでご参加下さい。

ラテン語／聖歌 入門（講義） Deus noster refugium（詩篇46）の一部を読んでみましょう。

合唱練習 Michel-Richard Delalande の同名の曲の一部を歌ってみましょう。

公開コンサート(参加型) このコンサートの中で、ご来場の方と共に合唱練習をします。
歌詞カードをお配りしますので、コンサートにお越しの方もお席にて歌ってみましょう。

場所 聖グレゴリオの家 聖堂（聖堂ロビーに受付を設けます。）
宗教施設としての注意点がございませぬ。これについては当日連絡します。
募集人数 20人(合唱／器楽) 18歳以下対象（ラテン語を勉強したことが無い方対象）
参加費 ご一家で2000円（ご両親、ご家族の聴講を含みます。） 参加当日お支払いください。
聴講希望者は1000円とします。ただし18歳以下は原則聴講不可とします。
（すべて聖グレゴリオの家賛助会へ寄付されます。） コンサートのみの参加は無料です。 自由献金あり

☆☆☆ 事前に八王子にてオーケストラの練習をします。ご都合が合えばご参加下さい。（無料）☆☆☆

保護者の皆様に受付、会計、お客様案内等お願いいたく存じます。どうぞご協力下さい。
一部のパートを大人が補います。それでも不足するパートがあるかもしれません。どうぞご了承ください。
（なお、会場設営、お客様案内、後片付けも皆でしましょう。） なお、ピッチはa=415Hzとします。

詳細

今回のラテン語テキスト：詩編46より次の一文を音節に分けて読み、そして歌ってみましょう。
Deus noster refugium et virtūs : adjūtor in tribulātiōnibus quae invēnērunt nōs nimis.

「神は私たちの避けどころ、私たちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けて下さる。」(新共同訳)

これは詩編 46 の第 2 文です。詩編はヘブライ語で書かれた旧約聖書の一部であり、150編より成ります。旧約聖書のギリシャ語訳、いわゆる七十人訳聖書(ラテン語 Septuaginta 仏語 septante)に含まれています。つまり、このラテン語はギリシャ語から訳されたものです。なお、ラテン語で詩編は psalmus / psalmi と呼ばれます。本セミナーの中で、この一文を音節に分け、またアクセントの位置を確認します。なお、母音上の横線はその母音が長母音であることを示します。

なお、マルティン・ルターの讚美歌「神はわがやぐら」(Ein' feste Burg ist unser Gott)をご存知の方も多いかもかもしれません。これは詩編 46 をドイツ語に訳し音楽を付けたものです。また、J.S.バッハのカンタータ 80 番『われらが神は堅き砦』(Ein' feste Burg ist unser Gott)はこの歌詞をそのまま用いたものです。私たちはその元となったラテン語を歌ってみましょう。

時間割 (一部変更となる場合があります。)

13:00	ガイダンス	
13:15	ラテン語入門	(三重野清顕)
14:15	聖歌入門	(五十嵐直美)
14:45	合唱練習	(又吉佑美)
15:45	休憩 (施設見学/オーケストラ準備)	
16:00	公開コンサート (参加型)	(又吉佑美)
	合唱練習を行いながら進めます。一部宗教曲以外の演奏がございます。	
17:00	片付け完了 (掃除片付け、忘れ物チェック)	

(18時より晩課 Vesperae あり)



補足

ラテン語のしくみ (音節、アクセントの位置) 予習してみよう!

次の事項を参考にして、今回勉強する上記ラテン語テキスト Deus noster refugium...を音節に分け、アクセントの位置を書き込んでみましょう。なお、ラテン語の母音には長母音と短母音がありますが、長母音はこのテキストにおいて、母音上の横線(マクロン)により示してあります。この記号の無いものは短母音です。

音節

一つの音節は一つの母音を中心に構成されます。母音の前に子音があれば「子音+母音」でひとつの音節となります。また、「子音+母音+子音」でもひとつの音節となります。母音に挟まれた2つの子音があれば、一つ目の子音が前の音節に含まれ、二つ目の子音は次の音節に含まれます。

アクセントの位置

アクセントは次の法則により規則的に決まります。

- ① アクセントは後ろから 2 音節目が長母音であれば、そこに置かれます。
- ② 後ろから 2 音節目が短母音であれば、アクセントはもう一つ前の音節に置かれます。ただし、後ろから 2 音節目が短母音であってもその後に子音が 2 つ以上あれば、後ろからの距離は十分となり、アクセントはそこに置かれます。

昨年取り上げた Requiem aeternam は、例えば次の様に歌われます。アクセントは小節の頭か、あるいはちょうど真ん中に(つまり二分音符単位に)来るようになっていました。Requiem aeternam の 2 つの単語はどちらも 3 音節です。また、母音はすべて短母音です。Requiem の Re と aeternam の ter にアクセントがあります。ter は後ろから 2 番目の音節であり、母音自体は短母音ですが、その母音の後に子音が 2 つ続くために後ろからの距離は十分となり(つまり長母音扱いとなり)そこにアクセントが置かれます。



この様に、詩編やミサ等のラテン語の文を多く知ることは、音楽の基本となったフレーズを知る事でもあります。

ラテン語を師として、音楽を ^{proferamus jubilo} ;喜びを持って形作りましょう。

また、普段あまり文頭にアクセントを置かない私たちにとっては、文の頭をはっきり歌い出すことも重要でしょう。単語の頭もはっきりと歌いましょう。

なお、ポルトガル語、イタリア語、スペイン語においても、音節の考え方およびアクセントの位置を決める原理は、ラテン語と似ています。つまり、基本的にはアクセントの位置はラテン語と同様、後ろからの距離で決まります。

ミサの一つに死者のためのミサがある。ラテン語では Missa pro defunctis(フランス語では Messe des morts と書かれることが多い。)が正式名称であり、カトリック教会において、通常 11 月 2 日の「死者の日」に挙げられるミサである。このミサでは死者のためのミサ(グレゴリオ聖歌)が歌われる。入祭唱 Introitus が Requiem æternam dōnā eīs, Domine,「主よ、永遠の安息を彼らにお与えください。」で始まるために、このミサ、並びにこのミサのために作曲されたものは Requiem と呼ばれることがある。レクイエムを作曲した作曲家は多いが、今回はアンドレ・カンブラ André Campra のレクイエムの一部を取り上げた。

ラテン語入門/Requiem aeternam (三重野清頭)

「ラテン語は古代ローマで用いられ、その後西方ヨーロッパのキリスト教世界の共通語となりました。また、近代にいたるまで学問の世界の言語として命脈を保ち、多くの学問的な著作もラテン語で残されました。ラテン語はスペイン語、イタリア語、フランス語などの直接の先祖にあたります。英語にも、フランス語を通じて多くの語彙がもたらされています。また、ラテン語は動詞や名詞が変化することで文中での役割を示す、屈折語に分類されます。」という紹介で始まり、動詞の人称変化、名詞の格変化の例が取り上げられた。発音はラテン文学の基本である古典式とした。続く、主な講義内容をあげると次の通りである。

ラテン語のアルファベットにおいて、i と u が母音、j と v は子音という形で後の時代に使い分けられるようになった。Publius Ovidius Naso 等の人名でラテン語の発音の練習をした。また、ホメロス等のギリシャ語の詩に倣って、ラテン語でも六脚韻(ヘクサメロス hexameter)という韻律があり、叙事詩をはじめとして多くの詩でヘクサメロスが使用された。ウェルギリウス(70BC-19BC)の牧歌より 'Sicelides Musae, paulo maiora canamus' 「シチリアのミューズたちよ、少しばかり大きなことを歌いましょう。」を例として、このヘクサメロスの説明があった。また、Requiem aeternam に文法解説を加え、アクセントの位置を確認した。やさしい言葉を選びながらも、大変深い内容だった。



Requiem のフランス式発音、イタリア式発音

フランス在住の赤枝サンテツソンさん親子による Requiem aeternam のイタリア式発音、並びにフランス式発音が紹介された。どの発音方式によっても音節が変わらないから、どちらの発音でも音楽に大きな変化はないと思っていたが、こうやって全く異なる読み方を聞いていると、そうとも言えないように思う。つまり、アクセントを強く出すイタリア式と、現代フランス語の発音に近く、また、全般に後ろの方に重みを残すフランス式では音楽も違った響きになるかもしれない。古典式に加え、イタリア式、フランス式発音を比べる貴重な機会となった。

グレゴリオ聖歌 (聖グレゴリオの家 五十嵐直美さん)

グレゴリオ聖歌「死者のためのミサ」missa pro defunctis の Introitus の部分をネウマ譜を用いて歌って戴いた。これは前日になってからお願いしたものである。あまり人前で歌うのは得意ではありません、とおっしゃっていたが、その抑揚の微妙さに多くの人が驚いた。

50 年程前まで、ラテン語でミサが挙げられていたそう。今回の様にカンブラのミサ曲を、楽譜をたよりに演奏することはできるのだが、50 年以上前はグレゴリオ聖歌のミサを知らない人はいなかったのだから、同じミサ曲と言っても、異なる響きだったかもしれない。今回の一つの得難い経験であった。



合唱 (又吉佑美)

Chor 1(最上部のパート)を全員で読み、音符に合わせて拍読みをした。この様にしてみると perpetua の第二音節の pe のところにアクセントがあるのだが、そこが小節の頭になっていることに気づく。aeternam は te のところにアクセントがあり同様の事が起きている。つまり、この2つの単語は語頭にアクセントが無いために、小節の頭からは始めにくい。これに対して Requiem は語頭のアクセントがあるので小節の始めに置くことができる。

また、声部に分かれて同じ様に歌詞の拍読みをした。今回パートが揃わなかったが、最後に各声部を合わせてみると合唱らしくなった。

又吉さんはオケとの事前練習に猛暑の中、八王子へ通って下さった。アレッシェンドロ・スカルラッチェのオペラのアリアに至るまで、正確に譜読みをしてご準備下さった。このため一回目の合わせから、大変スムーズだった。この調子で行くと、歌とオケが、もっと綿密に打ち合わせをして、スケールの大きな音楽にすることもできるだろう。今後、このような歌と器楽アンサンブルによる演奏がより一般的になる事を期待したい。それは器楽奏者にとっても大変勉強になる。



公開コンサートより (YOUTUBE “Una Passeggiata d’Organo”にて一部をご覧いただけます。)

Alessandro Scarlatti Griselda 'Figlio! Tiranno! Oh Dio!' 並びに Antonio Vivaldi oratorio Juditha triumphans 'Matrona inimica' の準備をする又吉さん。



**Johann Sebastian Bach
An Wasserflüssen Babylon BWV653
(詩編 137)**

フランスから来た 15 歳の方が弾く音楽は予想をはるかに超えてすばらしかった。オルガンをよく歌わせていて、どういう音楽をしようとしているのか手に取る様に分かった。専門家のゆるぎない演奏を聴くのも良いのだが、それだけがすべてではないと思う。ヨーロッパの音楽学校では生徒の演奏会を公開している事が多いから、町の人には地元の音楽学校の生徒の演奏を楽しみにしている方も多だろう。

申し込み、お問合せ

聖グレゴリオの家事務所 tel.042-474-8915 fax.042-474-8832

<http://www.st-gregorio.or.jp>

山野辺暁彦(企画立案、調整) 〒192-0914 八王子市片倉町 888-44 tel.042-635-3784

rpbjk640@ybb.ne.jp

お名前、学年、ご住所等連絡先を添えて7月10日ごろまでにお申し込みください。
弦楽器でご参加の方は楽器名もお知らせください。事前に資料等をお送りします。
ただし、チェンバロでご参加の方はなるべく早くお申し込みください。



池袋より西武池袋線「東久留米」駅下車
東久留米駅「東口」より徒歩10分、またはタクシー5分
〒203-0004 東久留米市氷川台 2-7-12

聖グレゴリオの家は、1979年9月に独立宗教法人として故グレオン・ゴールドマン神父(フランシスコ会)によって設立され、祈り、研究、教育という3本の柱から成り立っています。その目的は、祈り、典礼を祝いながら、教会音楽の研究、保存と普及、教育を行うことにあります。

聖グレゴリオの家賛助会

故グレオン・ゴールドマン神父によって創設された当研究所は、神父の母国ドイツや諸外国からの物心両面の支援に頼って参りました。しかしながらグレオン神父の帰天と援助をして下さった方の高齢化、世代交代に伴い、その支援は必然的に細りつつあります。海外の支援に頼るのではなく日本社会の中で聖グレゴリオの家の活動を支えていくために賛助会は2009年に発足しました。